

第3回県立高等学校改革懇談会（平商業・四倉）記録

日 時 令和5年8月3日（木）15時00分～16時30分
会 場 平商業高等学校 平商の社会館
傍聴者 4名

進行

（1） 開会

（2） 主催者あいさつ

【佐藤隆広】（県立高校改革監）

県立高校改革監の佐藤と申します。よろしくお願ひいたします。

皆様におかれましては、本日、御多用中にもかかわらず、また、暑い中御出席をいただきまして感謝申し上げます。また、日頃より本県教育に多大なる御理解と御協力をいただきまして、重ねて感謝申し上げます。

さて、昨年度開催しました2度の県立高等学校改革懇談会では、急激に進む少子化の状況など、県立高等学校改革後期実施計画を策定した背景や経緯、平商業高校、四倉高校の現状、そして、これらを踏まえた両校を統合する方向性を御説明させていただきました。また、子どもたちの学習環境を充実させ、継続的かつ安定的に、その場を提供するために、県内唯一の商業科、情報科併設校として、地域産業を支える人材を育成するための教育内容についても御説明させていただいたところでございます。

皆様からは、「四倉高校の生徒たちの中には、統合によって通学する校舎が変わるなど、環境の大きな変化に対応できないことが心配される」という御意見や、「地域の子どもたちや地元の声を聞きながら、地域の特性も取り入れた教育活動を行ってほしい」など、様々な御意見を頂戴しました。ありがとうございます。

本日は、前回の懇談会で頂いた御意見や御要望に対する県教育委員会の考え方をお示するとともに、これからの時代を担う子どもたちに、より良い環境をつくっていくための、統合校の教育内容の特色化、魅力化を図っていく方針を説明させていただきます。どうぞ、忌憚のない御意見を賜りますようお願い申し上げます、挨拶に代えさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

（3） 説明（担当）

（4） 懇談（進行 佐藤県立高校改革監）

<懇談>

【佐藤隆広】（県立高校改革監）

ここからは委員の皆さまから御意見、御質問を頂戴したい。

【阿久津隆枝】（四倉高校PTA会長）

今年度の4月から役員になったために、今まで出た御意見と被る部分もあると思うが、よ

ろしくお願ひしたい。現在、四倉高校のPTA会長を務めているが、私自身は平商業の卒業生であり、高校生活の3年間、自主独立の学風のもとで学んだ。その部分も踏まえて感じたことを言いたい。事前に懇談会の資料をいただき、統合計画の内容を確認したが、この教育計画の内容は、統合としての魅力化、特色化という点に果たして真に通じているのか、少々、疑問である。私には商業系の高校枠の中で、商業の世界の中だけでの多様性しか感じられなかった。つまりは、「統合とは言っても、結局は平商なのか」というのが率直な感想だ。私としては、もう少し商業の枠を超えて、もっと多様化させたい。四倉高校の要素もデュアル学習だけではなく、全体的に生かしてよいのではないかと思う。先日、四倉高校の公開授業を見てきたが、今の四倉高校は素晴らしいと思う。どのように素晴らしいのかというと、簡単な説明になってしまうが、まず、1つ目に、生徒達がとても楽しそうに授業を受けていたのが非常に印象的だった。先生との距離も近く、ゆっくりと楽しく学ぶ。それを見て「ああ、いいなあ。羨ましいなあ。」という思いで見えてきた。2つ目に、TT授業実践の徹底だ。1科目の授業に必ず先生が2人体制で付く。どんな教科も、得意な生徒と不得意な生徒がいる。その苦手な生徒のために取りこぼしのないよう、先生の目が届くTT授業が取り入れられていて、先生方の熱心さが伝わってきた。県の予算もあると思うが、私個人としては、とても良い体制だと思う。3つ目に、2年生からは自分の希望する進路に応じてコースが選べるということだ。例えば、福祉に興味がある生徒は、福祉の授業を選択することができて、ヘルパーの資格を取得することができる。他にも、看護師や保育士に興味がある生徒、進学を希望する生徒、それぞれの選択に沿った授業となっていく。希望すれば、年に1回、フォークリフトや小型建設機械車両の資格も取得できる。

そして、何より肝心なのは「高校を選ぶのは中学生である」ということだ。さまざまな中学生がいて、彼らはどのような考えで高校を選ぶのか、そこにも焦点を当てていきたい。「将来なりたい職業ランキング」を調べたが、現在、高校生男子がなりたい職業の1位は「公務員」、高校生女子がなりたい職業の1位は「看護師」である。これに対して、中学生男子がなりたい職業の1位は「ユーチューバーなどの動画配信の仕事」、中学生女子がなりたい職業の1位は「アニメーターなどのイラストレーター」である。高校生と中学生では、たった3年で、こんなにも精神年齢が違う。懇談会資料の11ページに、およそ48%の生徒が高校を選ぶときに、高校卒業後の進路や、それにつながる資格取得を考えて高校を選択するとあるが、果たして彼らは、本当に本音でそう語っているのか。実業高校が多いいわき市で、高校を選択する余地がなく、言わせてしまっている部分はないか。確かに中学生でも、既に将来を見据えている大人びた生徒もいる。しかし、そうではない生徒もたくさんいる。その中学生達が、目を凝らしても見えない自分の将来を即興で考えて高校を選ばなければならない。これは、ある意味、酷なことだと思う。中には、とりあえず高校に入って将来を考えたい生徒もいるはずだ。それは、今も昔も変わらないと思う。また、本音を言うと、「自分の偏差値が平商くらいだから、平商を受験しようかな」という生徒もいると思う。しかし、入学したものの、そこが自分に合わなかったときは、3年間地獄だ。そこで、「この学校を選んだのは自己責任だから」と割り切って頑張ることのできる生徒と、そうでない生徒が出てくる。私はその部分も懸念している。世の中の過半数の人間は、私を含め、普通能力の凡人だ。世の中の8割は、その凡人が税金を納めている。そして、優秀な人間ほど、大学入学をきっかけに県外に流出してしまうので、遠回りに思えても、普通の生徒たちを丁寧に育てていくことが地域発展の近道であると、私は考える。これは、あくまで、1つの案として、四倉高校の縮図のようなコースを1つだけでも作ってほしい。仮に、普通総合コースとか、呼

び名は何でもよいが、1年生のうち、普通科目を受けながら、将来を考える時間を設け、2年生からは四倉高校のように、多様なコースを選べるようにする。もちろんそこで、商業系の科目を選択するなら商業の道に、それが実現して初めて資料11ページに出てくる地域の中学生のアンケートにある、高校を選ぶときに重視すること、多様な進路に応じた学習ができる高校が統合により生まれるのではないかと考えている。せめて、1クラスだけでもいいので四倉高校を縮図にしたようなコースを作ってほしい。それがPTA会長である前に、一人の子どもの親としての私の願いでもある。

【佐藤隆広】(県立高校改革監)

今の御意見、1つ目は、統合校の魅力化について、商業の枠を超えて多様化してもらいたいこと。2つ目は、統合校での指導の体制や在り方を考えてもらいたいこと。3つ目は、多様な進路希望に沿った丁寧な授業を生徒に寄り添って行ってもらいたいこと。これら、3つの部分であると思う。

【中野正人】(県立高校改革室長)

「統合校についての魅力化が商業高校の枠を超えていないのではないかと」「もっと、商業高校の縛りから飛び出した多様な進路に応じたコースを設けることはできないか」という御意見をいただいた。現在、コース制を設けることについては、資料16ページにある、「流通ビジネス科」(仮称)と、新たに設ける「情報技術科」(仮称)の2つの学科で、コース制を2年次から採用していく予定になっている。流通ビジネス科では、2年次から「デュアルコース」で、現在、四倉高校で行っているデュアル実習を、統合校においても継承していく形である。この中で、生徒たちはさまざまな業種の仕事に触れて、将来、自分の就きたい職業を見極めていくことができるのではないかと考えている。実際にどのような形で進めていくかについては、現在の四倉高校の取組を参考にしながら、具体的な内容を検討していくことになる。先程の御意見にあった「多様な進路に応じたコース」というものが、これからの検討の中において、この「デュアルコース」に該当するかどうかは、今後の検討によると思う。今程いただいた御意見は、しっかり受け止めて、内容を検討してまいりたい。

【緑川直行】(有識者)

今の阿久津PTA会長のお話は、本当にそうだと思った。その件については、我々も何度も話をしてきたが、今日はその話ではなく別な視点で話をしたい。確認であるが、現在、平商業にある3つの学科(流通ビジネス科・情報システム科・オフィス会計科)については、統合校では、それぞれの学科の内容を拡充する形にして、新たに「情報技術科」を設けるといふことでよろしいか。

今まで示されてきた統合校の内容を見ると、会社に勤める人、つまりサラリーマンを育てるカリキュラムになっているような気がする。デュアルで職業体験をしても、おそらく、その会社の仕事を全部体験することはできず、商品の陳列や接客、レジ打ちなど、ちょっとした作業が中心になってしまうような気がする。職業体験という意味ではよいかもしれないが、会社や組織について学ぶことは難しいと思う。また、いわき市全体で協力してくれる企業を探すこと、その企業に生徒たちが通うこと、その生徒たちの実習先に先生方がまわること、いずれも大変なことだと思う。それから、仕事や職業について、例えば、今は車のエンジンが内燃機関からEVにシフトされているが、そうになると、ガソリンスタンドなどの関連業種

に影響が出る。また、銀行などはネットの利用やA Iの導入によって、今ある店舗がネットバンキングなどに代わっていくなど、環境がどんどん変わっていくと思う。そのような中で、高校卒業後、進学して、どこかに勤めるようになり、いずれ起業したいという人が出てくると思う。起業してくれる人がいなくては、地元は伸びていかない。そのため、起業したいという人を育てる部分があってもよいのではないかという感じがする。先日、四倉高校で交流会があり、同じグループの平商業の先生と「学校の中に疑似的なものでも良いから会社を作ってみたらどうか」という話をした。学校には、簿記ができる人もいれば、プログラミングもできる人もいる。また、現在、スーパーマートと共同で商品開発を行っている。おそらく、疑似の会社を立ち上げようと思えば、何社もできるのではないかと思う。ここは、1学科ではなく、学科を超えて会社を組織し、生徒の中から社長を選出して、会社の目標や方針を立て、財務や経理、総務を担当する人、商品開発、デザイン開発、営業や販売の担当をする人、これら全て、生徒たちでできるのではないかと思う。こういったものを作ると、職場体験に行っても経験できないような、自分たちが今までやってきた役割を生かすことができる。例えば、商品を並べようとするときも、自分の会社での立ち位置や役割につなげられるようになるのではないか。そうすると、最近多い、早期離職を防ぐことができるのではないかと思う。また、生徒が、「自分でこういう会社を作りたい」「こういう商品で、社会に貢献したい」と考え、それをもとに会社説明会を行って、新入生にPRする。新入生で、「私もやってみたい」という人がいたならば、面接を行う。面接自体も生徒が行うことにすれば、自分が、実際に就職するときに、「面接する側は、このように思っているのか」というのがわかってきて、面白い学びになるのではないかと思う。また、会社を作るとなったら、お金を融資してもらうために、会社の仕組みや事業計画を考える。こういうことに関しては、証券会社や銀行に相談すれば分かると思うので、相談の上、実際にやってみればよいと思う。

【阿久津隆枝】（四倉高校PTA会長）

それについて、平商業では商業実践の授業でやっていると思う。

【渡邊浩志】（平商業高校長）

（その商業実践の授業でやっていることを）もっと会社のように行ってみればよいのではないかということだと思う。

【緑川直行】（有識者）

実際に、そこに会社を作って、生徒たちでやってみてはどうかという話をさせてもらった。18歳が成人になって、契約という部分も出てくるので、会社組織を作って、例えばマートとの商品開発も会社同士の委託契約を擬似的に結ぶような形で行い、実際のところを生徒たちはそれによって学びを得るという形を作ってみてはどうかという話をさせてもらった。福島県内でも、実際に法人化をして会社運営している学校があると聞いたが、なかなか大変であるということだった。一方で、先日、徳島県では起業家を育てる「神山まるごと高専」という、5年間で起業家を育てるとい学校ができたそうだ。こちらは3年間なので、取り組み方が違うかもしれない。ただ、起業するとき、役立つことを習得できればよいのではないかと思う。創業するときには、創業するための補助金制度もある。それで、創業するにしても手続きが分からず、商工会に相談に来る人がほとんどだ。だからこそ、学校で会社を作ってみるのはどうかという提案をさせてもらった。

【佐藤隆広】（県立高校改革監）

貴重な御意見をいただいた。今、学内に模擬的な会社組織を設立して会社運営を学んでいくという、起業を意識した学び、起業について学び社会貢献していくことが必要ではないかという御意見だと受け止める。加えて、そのためのデュアルやインターンシップの在り方をどうすべきか、という内容であった。これに関して、事務局から話をさせていただく。

【中野正人】（県立高校改革室長）

起業家教育は、かなり前の段階から、商業教育の一つのテーマということで取り上げられていた。私、以前、群馬県で開催された全国商業研究大会に参加した際には、「無から有を生み出す起業家教育」ということで研究発表した学校の発表を伺ったこともあった。

福島県において校内に企業を作って取り組んでいる学校というと、若松商業高校が「模擬株式会社若商デパート」ということで、株式会社形式で、生徒全員が株主になり、模擬デパート、一般的に言う、購買部にはなるが、文房具やお弁当、アイスやジュースなど、さまざまな物を販売している。そのようなものの企画、運営、仕入れ、販売などを生徒たちが行い、年に一回は株主総会を開く。そして、生徒が卒業時に3年間まとめた配当金を受け取るというシステムを取り入れている。このように株式会社の形態を実際に学校の中に組み入れて、学びとして実践している学校はある。このような取組は、学校の魅力化、特色化の参考になると考えている。今後も、先生方と情報交換しながら、検討してまいりたい。非常に貴重な御意見に感謝する。

【小西秀典】（平商業高校同窓会長）

先日、母校の野球の応援に白河グリーンスタジアムに行ってきた。残念ながら、平商単独でのチームができず、今年から3校（平商業・いわき総合・相馬農業）の合同チームになってしまい、少子化の問題が切実なものになっていると感じた。野球の地方予選の様態を伝えるテレビ朝日の「甲子園への道」という番組を見ていると、商業高校が8校も地方予選の決勝戦に残っていた。例えば、徳島商業、高知商業、高松商業などが挙げられる。少子化ではあるが、なぜか四国や九州、中国地方の商業高校には生徒が集まっており、地方予選のベスト4以上に十数校が残っている。一方で、東北の現状を見ると、商業高校は、危機的な状況だ。どうして、このような格差があるのか。私は、前回、「商業高校の立ち位置が非常に不安だ」という意見を出した。私は、今回の統合に関しては賛成である。なぜなら、商業高校としての立ち位置で、これから生徒を募集しても、人が集まらないと思う。私の娘が高校を受験したときは「作る側」あるいは「使いこなす側」という選択肢に分かれていた。「作る側」は福島高専、平工、勿来工などの工業系の高校で、「使いこなす側」が平商などの商業系の高校で、専門的な深い学びを実践するという立ち位置なのかと思っていたが、どうも、そのような立ち位置が東北地区では見ることができなかった。また、全国の偏差値を見ても、公立高校の商業高校の偏差値にかなりの開きがある。実際、関西から西側の商業高校の偏差値はかなり高い。先程、四倉のPTA会長から、「今の自分の偏差値だと平商あたりが入れるから」という、現実的な意見があった。PTA会長も平商出身、私も平商出身だが、確かに1年のときには自分に合っているのかから始まって、気づきが2年からだった。確かに貴重な意見だと、実際に高校時代を平商で過ごしたので思った。

今回の統合で、現在、平商業高校も四倉高校も歴史はあるが、商業を全面に出してしまうと、今のいわき地区では、生徒を募集するにあたってのインパクトが弱く、今の平商業の入

試では、ほとんど不合格者が出ない。四倉高校は、ここ数年、定員割れしている。そのような両校が、原因は少子化もあると思うが、それを打開するために、あと3年あるので、中高生のアンケート結果にもあったが、この統合に関して、みんなで知恵を持ち寄って、検討にあたっては、「平商業と四倉が統合して、このようなことを中心に学べるみたい」という、時代に即したカリキュラムを何か一つ作って、中学生の夢に届くようなものを、この準備期間のうちにできたらよいのではないかと。まだ具体的には言えないが、みんなで知恵を出して、今回の統合の目玉にしたらどうかというのが私の意見だ。

【小野賢司】（有識者）

この統合校は福島県内で初めての事例となる、商業と情報に特化した学校になる。先程、四倉高校のPTA会長の話にあったが、せっかく県内で初めての事例になる統合校ができるなら、両者の良い部分が活かされて、かつ、両者が今まで培ってきた校風が活かされて、子どもたちが、「この学校に来て良かった」と言われるような、子どもたちに寄り添ったカリキュラムの構築をしていけばよいのではないかと考えている。普通科に近い学科も1クラスという話もあったが、まさにそのような形で子どもたちに寄り添う学校のような、子どもたちをコミュニケーション能力の高い、人に好かれる素直な人間に育てて、社会に送り出すという話になれば、本当によい形になるのだろう。今の時代、社会は使える人間、つまり、会社の上司や先輩の話に素直に聞くような若者を欲していると思う。そういう考えでないと、何を学んでも伸びないと思う。だからこそ、子どもたちに寄り添った、人間味のある学校を作ること検討していただきたい。

【佐藤隆広】（県立高校改革監）

只今、「県内初の情報科を併設する高校ということならば、平商業・四倉高校両校が培ってきた校風を生かすべきである」「子どもたちに寄り添った学校づくりが必要である」「社会に安心して送り出すためのコミュニケーション能力の向上を図るべきである」など、さまざまな視点から御意見をいただいた。そのような子どもたちに寄り添った学校づくりやコミュニケーション能力の向上に向けた取組など、その辺を含めて、事務局から説明する。

【中野正人】（県立高校改革室長）

商業高校のみならず、普通科の学校で就職を希望する生徒の割合が多い高校では、コミュニケーション能力を身に付けさせる指導をしている。「基本的な挨拶ができる」「当たり前のことが当たり前でできる」などは、基本的な社会人としての素養、ビジネスマンとしての基礎になるものであると捉えている。そのような観点で、商業高校だけではなく、就職希望者が多い学校では、マナー教育などに力を入れている。統合校においても、そのような内容については、しっかり取り組んでいきたい。今後は、子どもたちが「人に好かれる、素直な人間」になるようにするにはどうすべきか、先生方と共有しながら考えていきたい。

【武藤與史昭】（四倉高校同窓会長）

阿久津PTA会長、小西同窓会長から、色々な意見を聞いて安心した。ただ、多様な生徒に向けて、魅力ある授業を作り、それに沿った指導ができるのは、学校の先生方だと思う。そのため、新しい歴史を作るならば、やはり、その学校に合った教育計画、課題解決に向けて、できる限り教師を研修に参加させる機会を作り、生徒のニーズに対応する即戦力になる

ような教師を育成してほしいと思う。そして、この新しい教育の実践によって、生徒たちは希望を持ち続けることができるであろう。現状、学校では不登校や退学者の問題を抱えているが、統合校は、このような不登校者、退学者に加えて、悩みを抱えて自殺してしまう生徒が出ない学校にしてほしい。これまでは、先生も生徒もお互いにリスペクトをしていたと思う。学校教育においては、何か一つ、そこに「魂」みたいなものを持ち続けさせなければ日本の教育は駄目になってしまう。そして、その「魂」を子どもたちがしっかりと受け継いで、日本を守ってほしいことを考えている。今、自殺する人が多い。それは、「不易と流行」と同じように、何か偏ってしまっただけで「それをやっていけば、人生を安全に生きていけるのだ」ということを見失い、どこかで挫折してしまう人がいるからだと思う。だから、新しい教育を始めるために、先生方には、たくさん研修をしていただき、それが継続できれば一つの歴史になっていく、そのような校風を作っていただければと思う。そして、将来にわたって、自分らしく生きる道を直接選択できるような、統合校を考えてほしい。

あと、もう一つだが、四倉高校の跡地に関する話だ。やはり言っておきたいのは、再び起きるかもしれない地震や津波などが起きた際、避難場所として、四倉高校の体育館などを有効に活用できる手立てを市教育委員会にお願いしたい。かつて、四倉高校の生徒は、2000人もの避難者を受け入れ、しっかりと世話をしてきた。何に代えても避難者を援助するというスピリットを持っている生徒がいるのが四倉高校生の良さである。そのような点を汲み上げてもらい、開校まであと3年、いい方向に進んでいけるようになれば大変ありがたい。

【佐藤隆広】（県立高校改革監）

1点目として、多様な生徒に応じた指導が必要である。そのためには新しい教育内容、新しい学科内容で、統合校が始まることになるので、先生方も体制を整えた上で教育をスタートできるようにしてほしいということ。2点目は、四倉高校の跡地の利活用に関する話を伺った。四倉高校の跡地の利活用については、現在、いわき市とどのような形で利活用できるのかを今年の春から話し合いを進めているところである。

【中野正人】（県立高校改革室長）

多様な生徒に指導できる教員を、しっかりと育成すべきだという意見については、今回の統合の話だけではなくて、全ての学校の中に、いろいろな課題を抱えて生活している生徒は存在している。さまざまな要素があって悩み苦しんでいる生徒はいるという現状である。この問題について、本県では、そのような生徒たちの手当てをするべく、今年度から特別支援コーディネーターというものを試験的に該当の地区に配置し、解決につなげていこうと考えている。また、従来から各学校に、特別支援教育コーディネーターという役割を担った先生が、特定の生徒に対して、個別な支援が必要か否かを先生方で話し合う組織のリーダーとして取り組んでいる。御心配の点は、本当にその通りだと考えており、教育に携わるものとして、しっかりと取り組んでいかなければならないと思っている。これは、本庁に持ち帰って話題にしていきたい。

【佐藤隆広】（県立高校改革監）

今回、第3回目の懇談会になるが、この懇談会に初めて出席されている方で御意見はないでしょうか。

【高野吉雄】（有識者）

県教育委員会にお願いがある。今回の平商業と四倉の統合について、一番の特色は「情報科」を作るという点になると思う。具体的な検討については、中学校での学校説明会までには、大筋がまとまると思うが、逆算するともう1年くらいしか無い。それで、私も昔の商業科の教員だったが、仮に「情報科をあなたが中心に検討をしてください」と言われたら、「情報科？ どうすればいいかな？」という疑問が始めに出てくると思う。平商業あるいは四倉高校の先生方の中に情報の専門家がいればよいが、現在の平商業と四倉の教員に、「これを検討していただけますか？」と言っても、情報科というものについて、どうすればよいのか、先生方は悩むことになってしまうのではないかと思う。統合校において情報科をメインに出すとするならば、福島県には会津大学があるので、情報の専門的な教育を受けた人を現場へ配置してもらえると、現場の作業が効率よく進むのではないか。あと2年弱あるからといって、先送りなどせず、早めに検討する職員を現場に配置し、現在勤務している先生方、関係者、そして新たに情報科の立ち上げに加わる人、それぞれの立場の人の意思の疎通ができるよう、早めに準備していただければよいのではないか。

もう一つ、かつて、平商業と連携していた東日本国際大学に、今度「情報系」に特化した学科（デジタル創造学部（仮称））ができるという話を聞いた。そのようなことであれば、今後、可能であれば、早めに高校と大学の連携をやってみれば良いのではないかと思う。地元の大学を出れば、地元での就職も容易にできる。その結果、関東へ出ていってしまう学生より、地元に着る学生が増えて、地元定着、地元への還元も可能になると思う。これは、あくまでも、こういったことができるということではなく、一つの考えとして話した内容なので、検討材料になれば、ありがたい。

【佐藤隆広】（県立高校改革監）

大きく2つの内容をいただいた。1つは、検討段階から、情報科の中身を検討できる専門人材を配置して、教育内容などを検討するべきではないかということ。もう1つは、大学との連携ということであろう。これからカリキュラムの具体化を図っていく上で、貴重な御意見だと思うので、是非、参考にさせていただきたい。

【吉田靖】（有識者）

皆さんが、カリキュラムのことをメインに話をされているので、皆さんが触れていないところを話させていただく。校舎方式について、前回、第2回目の懇談会的时候、「校舎方式を採用してほしい」という要望をしていた。そして、今回、前回の内容から、大きく変わって、校舎方式を採用するという形が示されて良かったと思っている。令和8年で閉校するが、この校舎方式を取ることで、在校している2年生、3年生は卒業するまで、統合校の四倉校舎に通うことができる。「四倉高校の校舎がある2年の間に、本校舎の生徒とは交流会や合同行事を実施する」、資料の15ページに「地域の特性を生かした取り組み(案)」「地域イベントへの参加」とある。できれば、四倉の行事にぜひ本校舎の生徒が参加できるような取組を考えてもらえばありがたいと思っている。仮に、統合と同時に四倉高校が閉校するというのであれば、四倉に縁もゆかりもない状態での地域との交流となるが、2年間でも、四倉に校舎があることで、本校舎と四倉のつながりが残ると思う。是非、四倉校舎を生かした取組を行っていただきたい。

先日、四倉高校で来年度の体験入学があり、取材させてもらった。ちなみに、来年の4月

に入学する生徒は、3年生のときに統合する学年で、自分たちが在校している間に、四倉高校は無くなってしまふわけだが、体験入学の参加者は例年並みの人数だったので、「統合して学校が無くなるから、受験することを止めようか」という影響は、無さそうな感じではあった。それで、体験入学に来ていた生徒に「四倉高校を受験しようと思っているのか」と話を聞くと、「近いから受験したい」、「歩いて通えるから受験したい」という、単純なことかもしれないが、その子どもたちにとっては、自分の地元にある学校に通うことができるというのが、とても大きなメリットの一つのようであったので、校舎方式が採用されれば、そのような子たちも安心して学校生活を送れるのではないかと思う。高校3年になって大きな学校に放り込まれて右往左往することなく、慣れ親しんだ環境で3年間、学校生活が過ごせるのではないかと思った。この校舎方式が採用されるということは、大変良かったと思っている。そして、統合から2年間だけでも、四倉校舎を利用して地元との交流が続けられるような取組を考えてもらいたい。

【佐藤隆広】（県立高校改革監）

前回の改革懇談会の中で、「慣れ親しんだ地域の中で、かつ通学しやすい環境が変わることへの不安がある」という御意見をいただき、そこを踏まえて、今回、校舎方式の採用を提案させていただいた。そして、もう一つ、「統合後、四倉地域とのつながりや交流が大事なのではないか」という御意見をいただいた。これについては、この高校の再編を進めるにあたり、必ずいただく御意見であり、我々も大切なポイントだと考えている。我々としても統合によって地域とのつながりが断たれることは避けたいと考えているので、どのようなことができるか、しっかりと検討したい。

【木田努】（いわき市政策企画課 参事兼課長）

今回のカリキュラムや統合の中身については、地域の人材育成にとって、すごく有用な取組になると期待している。そのような中、前回の会合等の中で地域の意見を丹念に、子どもたちの声を聞くということで、アンケートを取っていただいたり、交流会で地域の方々の声を聞いたりしていただき、感謝している。このような形で、地域の声を聞いていただきながら、学校運営にも生かしていただき、地域にとって有意な人材育成に努めていただく、その仕掛けを今後も持ち続けていただけると、大変ありがたい。先程も出ましたが、県内初の特徴ある学科であるので、疑似会社の取組のような、「この学校に来ると、県名初のいろいろなことができるんだ」というワクワク感が持てるようになってくると、子どもたちにとっては夢が広がるのではないかと思う。それで、アンケートを見ると、「eスポーツ部を作ってほしい」「フラダンス部を作ってほしい」など、他の学校に行くと、なかなか経験できないような面白い回答があった。これからは、「ITとビジネスの融合」、先程東日本国際大学の話もあったが、いわば「情報化」というものが非常に大事なものになってくるだろう。そのため、国として底上げをする流れになっているので、そういう流れに、新しい高校のベクトルを合わせていただきながら、うまく運営を凶ってもらえばと思っている。それに加えて、四倉高校PTA会長からもあったが、四倉高校が実施している、2人の先生が付いて丁寧に生徒を育成するような四倉高校の良さも生かしつつ、新たな学校を育てていただきたい。また、少し方向性は違うかもしれないが、「女性活躍」というところも学校の特色として見出していただければ、「多様性」という部分から子どもたちにとってワクワクするものになるのではないかと思う。これらのことをうまくまとめていただき、統合校を作っていけば、来

年度の学校説明会で、子どもたちが「この学校に行ってみよう」という気持ちになるのではないかと思います。これから本当に、この統合校は、ブレイクスルーを起こす、新しい分野の学校になると思う。それに加えて、未来のいわきを担う人材育成にとって大事な学校になると期待している。

【佐藤隆広】（県立高校改革監）

地域人材の育成に期待を持てる学校づくりというのが大切であるという御意見をいただきました。そのためには、統合校が開校した後も、地域の声を聞きながら、学校運営に生かしていく取組が必要なのではないか。そのためには、当然、今の中学生も含めて、統合校が魅力ある、ワクワクするような、カリキュラムづくりや教育課程以外の部分でも、他校にはない「売り」が必要であるという話を伺った。カリキュラムを進めていく中でSDGsという多様性や女性活躍という視点からの検討も必要なのではという貴重な御意見をいただきました。

【中野正人】（県立高校改革室長）

今程いただいた御意見は、非常に参考になるものである。情報科を設置する上で、どのような学校づくりをしていくのか、あるいは、統合校全体として地域で活躍できる人材の育成をどのような視点で行っていくのかというところで、御意見をいただきました。また、中学生たちが目指したくなるような学校づくりということについても御意見をいただきました。今後、検討を進める中で、是非、参考にさせていただきたい。

【佐藤隆広】（県立高校改革監）

予定していた時間も迫ってきている。皆さんから御意見がないようでしたら閉じさせていただきます。

あいさつ【佐藤隆広】（県立高校改革監）

皆さまから大変貴重な御意見をいただき、ありがとうございます。県教育委員会からは四倉高校の在籍生徒への支援としての校舎方式の採用、それから中高生へのアンケート、魅力化を考える交流会の意見をもとにした魅力ある学科にするための方策などを今回、提案させていただきました。皆さまには、統合校の方向性について、概ね御理解をいただけたと思っております。ありがとうございます。

懇談会は今回で一区切りとさせていただきたいと思っております。今後は、今回いただきました御意見を踏まえまして、両校の先生方と相談しながら、より具体的な検討を進めてまいりたいと考えております。また、中学生、その保護者の皆さん、中学校の先生へ、統合校の魅力等々について丁寧な説明にも努めてまいります。

いわき市をはじめ、商工会や地元企業等の御協力をいただきながら、地域を支える核となる人材を育成する、そのような魅力ある統合校をしっかりと作り上げていきたいと考えております。

委員の皆様には、これまで忌憚のない御意見を賜りまして、改めて感謝申し上げます。本日はどうもありがとうございました。

（５） 閉会